

平成26年度沖縄群島病害虫発生予報第2号(5月予報)

I 5月の気象予報

向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)

	気 温	降 水 量	日照時間
高い(多い)	20	20	40
平 年 並	30	40	40
低い(少ない)	50	40	20

(平成26年4月24日付沖縄気象台発表・沖縄地方1か月予報)

平年値

	平均気温(°C)	最高気温(°C)	最低気温(°C)	降水量(mm)	日照時間(h)
沖縄群島(那覇)	24.0	26.7	21.8	231.6	145.8

(沖縄気象台発表・統計期間1981～2010・資料年数30年)

II 5月の発生予報および防除上の注意事項

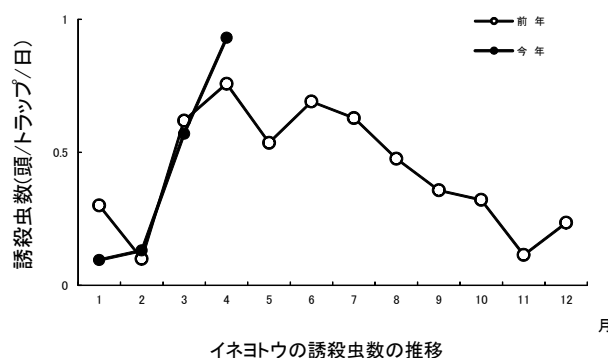
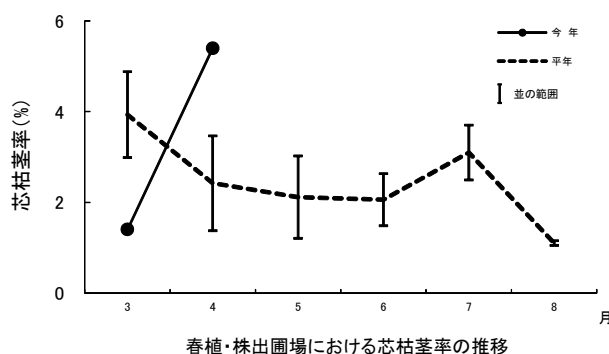
1 さとうきび

(1) イネヨトウ

発生の程度 : 多

予報の根拠

- a 4月中旬の調査の結果、春植・株出圃場における芯枯茎率は5.4%(前年2.7%、平年2.4%)と平年より高かった。
- b 4月のイネヨトウ合成性フェロモントラップによるトラップ当たり日当たり誘殺虫数は0.93頭(前年0.7頭)であった。



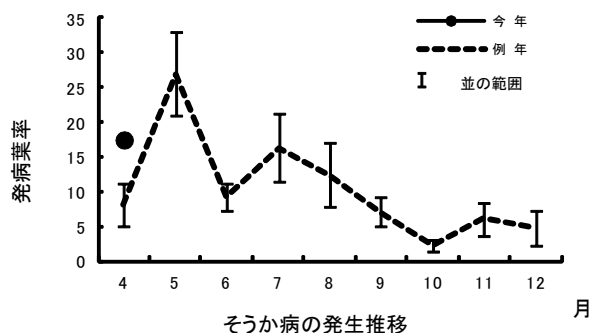
<防除上注意すべき事項>

- a ふ化した幼虫は、葉裏や葉鞘部から下部に移動した後、地上部の芽や根帯から食入し、生長点を加害して芯枯れを起こさせ茎を枯死させる。
- b 加害による芯枯れを防止し有効茎を確保するため、植付時・株出管理時および生育初期の防除を徹底する。
- c 圃場内外のイネ科雑草は発生源となるため除去する。
- d 植付時および株出管理時に土壌害虫の防除を兼ねた薬剤(粒剤)を施用する。
- e 平成25年度病害虫発生予報第6号(平成25年8月30日付)コラム参照。

2 シークワーサー

- (1) そうか病
発生程度 : 多
予報の根拠

4月下旬の調査の結果、発病葉率は17.5% (前年7.5%、例年8.1%) と例年より高かった。



<防除上注意すべき事項>

- 本病は罹病葉・枝が伝染源となり、雨水によって伝搬される。
- 罹病葉・枝はできるだけ除去し、雨滴や露が早く乾くように園内の通風をよくする。
- 窒素肥料の過剰施用は軟弱な枝葉の発生を助長し、本病の発生を助長するので避ける。
- 発生がみられる園地では梅雨入前の薬剤による防除を徹底する。

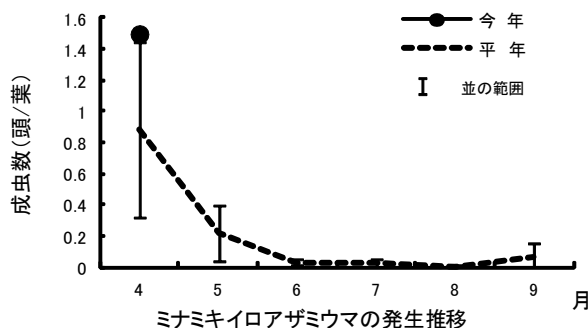
3 マンゴー

- 炭疽病の防除対策
 - 4月下旬の調査の結果、発病枝率は37.7%であった。
 - 本病の病原菌は花芽、花序、葉などにすでに潜在感染していることが知られており、収穫果実への被害軽減のため、今後袋がけ前までの防除対策が重要である。
 - 罹病した新梢、残渣は速やかに施設外に持ち出し処分する。
 - 結実～果実肥大期には治癒効果のある薬剤を選定し、定期防除に努める。
 - 平成26年度病虫害発生予報第1号(平成26年3月24日付)コラム参照。
- チャノキイロアザミウマの防除対策
 - 4月下旬の調査の結果、葉あたり虫数は0.1頭(前年0.5頭、平年0.3頭)と平年よりやや少なかった。
 - 不用な新葉は本種の発生を助長するので、早い時期に除去する。
 - 幼果が食害されると果実品質が低下するので、幼果時期の薬剤防除を徹底する。
 - 発生源となる施設内外の雑草を除去する。
 - 薬剤抵抗性を発達させやすいので、同系統薬剤の連用を避ける。

4 へちま

- (1) ミナミキイロアザミウマ
発生程度 : やや多
予報の根拠

4月下旬の調査の結果、ミナミキイロアザミウマの葉当たり成虫数は1.5頭(前年3.3頭、平年0.9頭)と平年よりやや多かった。



<防除上注意すべき事項>

- 発生源となる圃場内外の雑草を除去する。
- 持ち出し時に圃場内の虫の分布を広げてしまう危険があることから、除去した寄主植物はビニール袋に入れるなどして、施設外に持ち出し処分する。
- 薬剤抵抗性を発達させやすいので、同系統薬剤の連用を避ける。

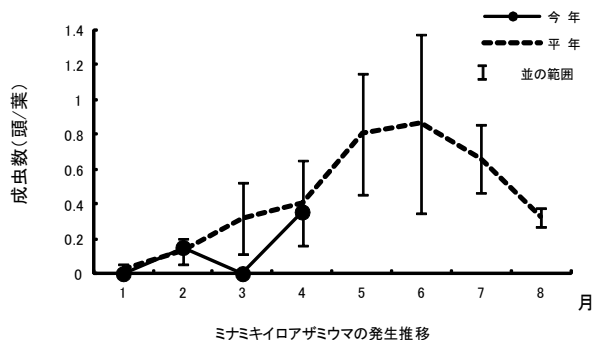
○ べと病の防除対策

- 4月下旬の調査の結果、一部圃場で多発生がみられた。
- 例年5月の発生が最も多い。
- 排水、通風をよくする。
- 肥料切れしないよう適正な施肥を行う。
- 雨滴等による病原菌の跳ね上がりを防止するため敷草かビニールマルチを行う。
- ハモグリバエ類幼虫の食害痕等から病原菌が侵入しやすいので同虫の防除を行う。

5 きゅうり(施設)

- (1) ミナミキイロアザミウマ
発生程度 : 並
予報の根拠

- 4月下旬の調査結果、葉当たり成虫数は0.35頭(前年0.07頭、平年0.74頭)と平年並であった。
- 今後の気温上昇に伴い、本種の発生が増加することが予想される。



<防除上注意すべき事項>

- 本種は灰白色斑紋病や黄化えそ病の媒介虫である。
- 施設周辺の雑草は本種の発生源となるので、除草を行う。
- 施設開口部には目合いの細かい防虫ネットを展張し、本種の侵入を防止する。
- 摘心や摘葉後の残渣は、本種の発生源となるので、ビニール袋に入れるなどして密閉し、施設外に持ち出し処分する。
- 薬剤抵抗性を発達させやすいので、同系統薬剤の連用を避ける。

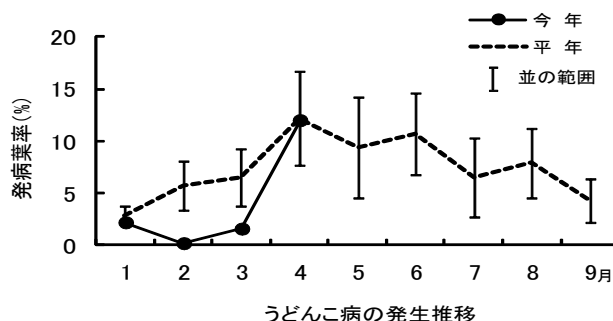
6 にながり(施設)

(1) うどんこ病

発生程度 : 並

予報の根拠

4月下旬の調査の結果、発病葉率は12.0%(前年3.2%、平年12.2%)と平年並であった。



<防除上注意すべき事項>

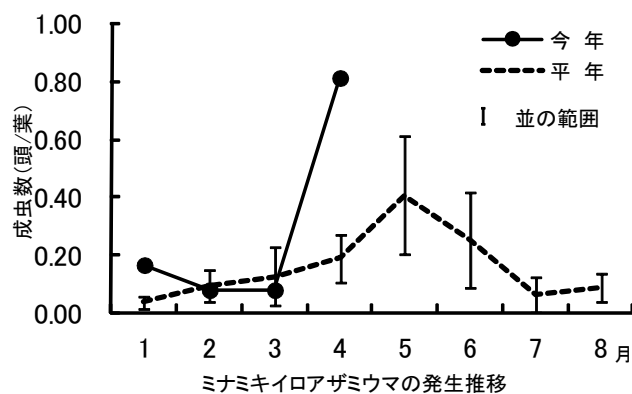
- 発生源となる不要な老葉・下葉を除去し、透光通風をよくする。
- 除去した葉は圃場内に放置せず、ビニール袋等に入れるなどして持ち出し処分する。
- 薬剤防除は予防散布に重点をおく。

(2) ミナミキイロアザミウマ

発生程度 : やや多

予報の根拠

- 4月下旬の調査結果、葉当たり成虫数は0.81頭(前年0.57頭、平年0.19頭)と平年よりやや多かった。
- 今後の気温上昇に伴い、本種の発生が増加することが予想される。



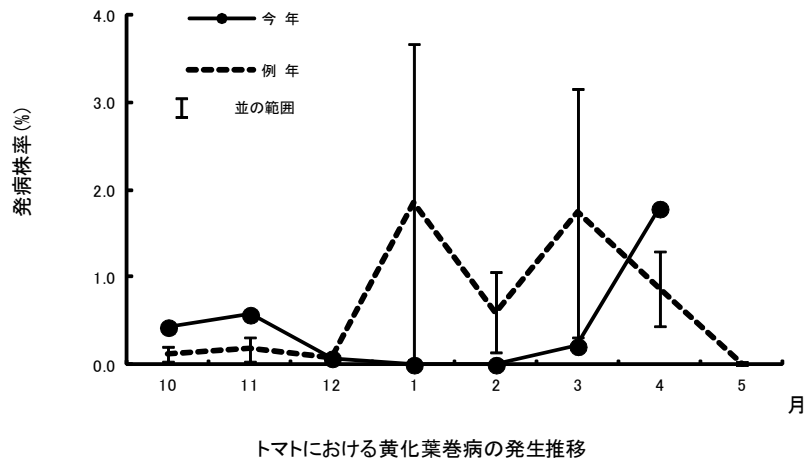
<防除上注意すべき事項>

- 施設周辺の雑草は本種の発生源となるので、除草を行う。
- 施設開口部には目合いの細かい防虫ネットを展張し、本種の侵入を防止する。
- 摘心や摘葉後の残渣は、本種の発生源となるので、ビニール袋に入れるなどして密閉し、施設外に持ち出し処分する。

7 トマト

- (1) トマト黄化葉巻病
発生程度： やや多
予報の根拠

4月下旬の調査の結果、発病株率は1.8%（前年0%、例年0.87%）と例年よりやや高かった。



<防除上注意すべき事項>

- 発病株は感染源となるため、早急に抜き取る。抜き取った株は必ずビニール袋に入れるなどして密封し、圃場外へ持ち出し処分する。
- 施設内外の野良生えトマトは、本病の感染源および媒介虫であるタバココナジラミの発生源となるので、抜き取り密封処分する。
- 黄色粘着テープ等により、タバココナジラミの早期発見・早期防除に努める。
- タバココナジラミの薬剤防除を行う場合は、マルハナバチに影響の少ない薬剤を選定する。